

是は西洋の諺だ想で解り切た語ですが衣服ばかりでなく總ての事に應用の出来る格言である、一家を處理する上に於ては總てこの羽織裁縫的考へが無ては成らぬ

男は耕耘を勤め女は絁織を修む

是は元正天皇の宣ひし御語にて萬乘の尊位に在しまして尙且つ世人の怠慢を箴められたるものである、要は一家を經營するにも男は外にありて稼ぎ女は内に在りて勤むるに在る、彼の管子と云へる書に「一農耕ざれば民或は之が爲めに飢へ一女織らざれば民或は之が爲めに寒し」とある語と同一の金言だ

小債を拂ふて大信を得よ

瑣細な借金は莫大な信用を失ふの基凡そ家政の出納向きは大抵妻君の司掌る所である、出入りの商人の通帳に對する支拂ひ、日用の小遣錢

等、豫じめ額を定めて月の始め良人から支給さるゝが世間普通である、妻君は是を以て總て、經費に充つる習ひであるが動もすると良人たるもの此支給を履行せずして妻君の請求を受くるも請拂は翌月繰越した杯と澄し込みて顧みざる小借金が何ぞ知らん或る方面に向て大なる信用を失ふの基である

一度の姦淫は終生の淫婦

此語は別段事々しく説明せずとも解り切つた事で譬にも言ふ「一度が末代」である、一度斯る悪い事をすれば一生涯それ自身の跡に染み付て其者は如何なる名譽を得るとも如何なる位置を占むるとも悪臭は附て廻つて抜ける物ではない。

嚴家に悍虜なし慈母に敗子あり

是は韓非子に載する所の語で嚴しき正しい家庭には惡猛い者は出來な

くて、甘やかす母親の子には碌でもなき爲めにならぬ兒が出来ると云
のだ、古き語にも「養ふて教えざるは父の罪、教えて嚴ならざるは師
の過」と云ふのと同じ様な義で小兒を教育するは家庭に於る一大難事
であつて能く注意せねばならぬ

女と船は常に粧飾を要す

是は予が洋行歸りの某紳士から聞た語で西洋の諺だそうだ「女は髮形
容」など云ふ日本の古い諺と同一の譬へです、畢竟婦人は常に奇麗に
身を持つて居れと云譯であつて取りも直さず身たしなみが肝要である

と云ふ義

口と財布は披けば損

古い川柳に「口開けば大小知れる智慧袋」と言ふ句が有る夫とは少し
趣きが違ふが畢竟無闇に喋らぬが宜い「口は禍の門、舌は禍の根」で

ある、財布も亦口と同じ事で披けば必ず金が出るものと極つて居から、
該の二ツを對して警戒た格言で、要するに無用な事は喋るな、無駄な
金は費ふなど言ふのである、

手紙は能く讀みて封じよ

是は簡單すぎて語が足りない様だが、凡そ手紙を認めたならば一應能
く讀んでから封じて出せと云ふ意味である、只一片の書き放しでも
受取りて讀む者に取りては中々の大切なものだ、一字一句の書き誤り
が非常な間違に成るまいものでもない殊に書た物といふ物は非常な勢
力のあるものであるから、分けても念には念を入れ、注意しなければ
成らん世間には往々手紙を亂暴疎忽に書くを磊落か何かの様に心得え
「僕は手紙は書ッ放しだ」などと大威張りで居る人があるが大變奇聞
違ひだ甚だ心得違ひだ、受取る人に依つては其手紙に依て差出人の性

寡言は婦人の美飾

質を推し量り信不信にも關係する事が無いとは言へない、

猥りに晒るものは心の奥まで他に見透されて卑しいものである、殊に婦人は男子に比して姦しいと常に評され居れば尙更に言葉を慎み成る可く言葉寡さが寡さが奥床しくつて自然と淑徳を飾るに足るものである、古歌にも「ほととぎす人も言葉の多かるは品少しと一聲や啼く」など、咏たのが有る又「言葉多くて品寡し」など、昔しからお多言は堅く戒めて有る、

答を吝めば小兒を損ふ

答と云ても無暗に鞭ち叩くと云ふ譯ではないが、畢竟、可愛々々と思つてシツケもせず悪い事をして叱り戒め無かつた日には其小兒は役に立たぬ碌でなしに成ると云ふ意味である、古の諺に云ふ「可愛い兒

には旅」と云ふ語も此意から割出したものだ一人にする兒なれば着せよ雪の装」とは予が嘗て咏た句だが、立派な人に仕立やうと思へば雪の装も着せて辛い思ひをさせるが却て其子の身の爲で有ると云ふのである、

小兒の三十分間

小兒が三四歳に至るまでの間は餘りに干渉せず、強て教育をも施さず自然の發達に委せて置くが却つて小兒その者の心力を發達させて宜いと云ふ事は教育家より屢々聞き取る所ですが、是に就て予は過日試みに小兒に好き氣儘をさせて毫も關涉せず捨惜た、併し夫も僅三十分間です即ち午後六時三十五分より同七時五分に至る此僅三十分間に於ける彼が戯遊の歴史と云ふものは頗る趣味を有して居るので有ります、

彼は當年三歳と云ふ數へ齡では有るが一昨年の三月に出生たので丁度二年と四ヶ月になる男子です、母親も坊やの腕白には困り切ると歎息し、女中も坊ちゃんのお戯には弱り升と泣顔する程のイタツラ盛りです彼は先臺所に至り窓の下より十能を持出し來りて振廻すを母親に叱られて再び臺所に去り此度は火吹竹を持來つて襖と言はず障子と言はず叩き廻つた其間に不斗目に付いたは玄關に立掛けてある雨に濡れた傘、是れを撥ぎ込んで座敷の中で擴げて差さんと云ふ彼の目的らしい、夫は大變だと女中に遮られ意地張て泣うとしたが又氣を換へて、此度は彼が財産なる手遊の入れある籠に目を注げた、山の如く積みある手遊を兩手にて抱へ母親の傍に持來りて種々なる手遊を一ツ一ツ把出して居る内其中の喇叭を把て吹始めた喇叭は彼が常から氣に入りの手遊である能く吹き能く鳴るより甚だ氣に入りしもの、如く

自ら拍子を取るかの様にいろ／＼に節を付けて吹き出した此喇叭を吹き居りし間凡そ五分間、彼は喇叭にも飽きて放り出し數多ある手遊を盡く投出したる終りに手遊籠を冠りて遊ばうとしたをお止なさいよと又もや女中に止められて彼は其籠を伏せてヤツシヨ／＼と座敷中を押して廻つた、暫くにして是にも厭き、手が吸掛けし煙草を把つて手當り次第に器物を撲り始めたからコハ堪らぬと母親は奔上げんとしたから彼は渡すまじとダバを捏ねて遂に泣出した、母親は此際隙さず「坊や」と言つて乳をチラリと見せた、乳を見せられた彼は忽ち泣止み笑を含んで母親の膝に駆け上つてチュウチュウと吸ひ乍ら勞れて眠つて仕舞たです、

茶 受 談 語

茶 受 談 語 終

明治三十六年六月十五日印刷
明治三十六年六月廿日發行

定價廿五錢
KOHROHONSHUHO
KOHROHONSHUHO

編纂者 澁谷 愛

發行所 株式會社 國光社
東京市橋區築地三丁目廿一番地

發行者 右代表者 橋本忠次郎

印刷者 河本龜之助
東京市橋區築地三丁目二十番地

東京市神田區本町 國光書房

東京市日本橋區西 青野文魁堂



大 賣 捌

東京國光社印刷

24/9/37

東京國光社發兌

訂正第十四版

細川十洲翁序
三輪田眞佐子著
子女の本分

定價金廿五錢
郵稅金六錢

大和綴美本

西村茂樹序 三輪田眞佐子著
女子處世論

訂正第八版
(定價金廿錢 郵稅金四錢)

指原乙子編纂
女子文章範

(定價金卅錢 郵稅金四錢)

生田目經德編
雅文消息集

(定價金廿五錢 郵稅金四錢)

堀内新泉著
再版
家庭小説 女樂師

(定價金卅五錢 郵稅金六錢)

東京國光社發兌

堀内新泉著
菊判美本
定價金十八錢
家庭の鑑
松川碩著
結婚と家庭

定價金十五錢
郵稅金四錢

女鑑編輯局編纂
編新
ひめ、み
定價金二十五錢
郵稅金四錢

杉谷正隆編
家庭訓
修身百首

定價金二十錢
郵稅金四錢

東京感化院長高瀬真卿講述
修身一夕話
上製 定價金六十錢 郵稅金八錢
並製 定價金三十錢 郵稅金六錢

96
265

東京國光社發兌



少女讀本

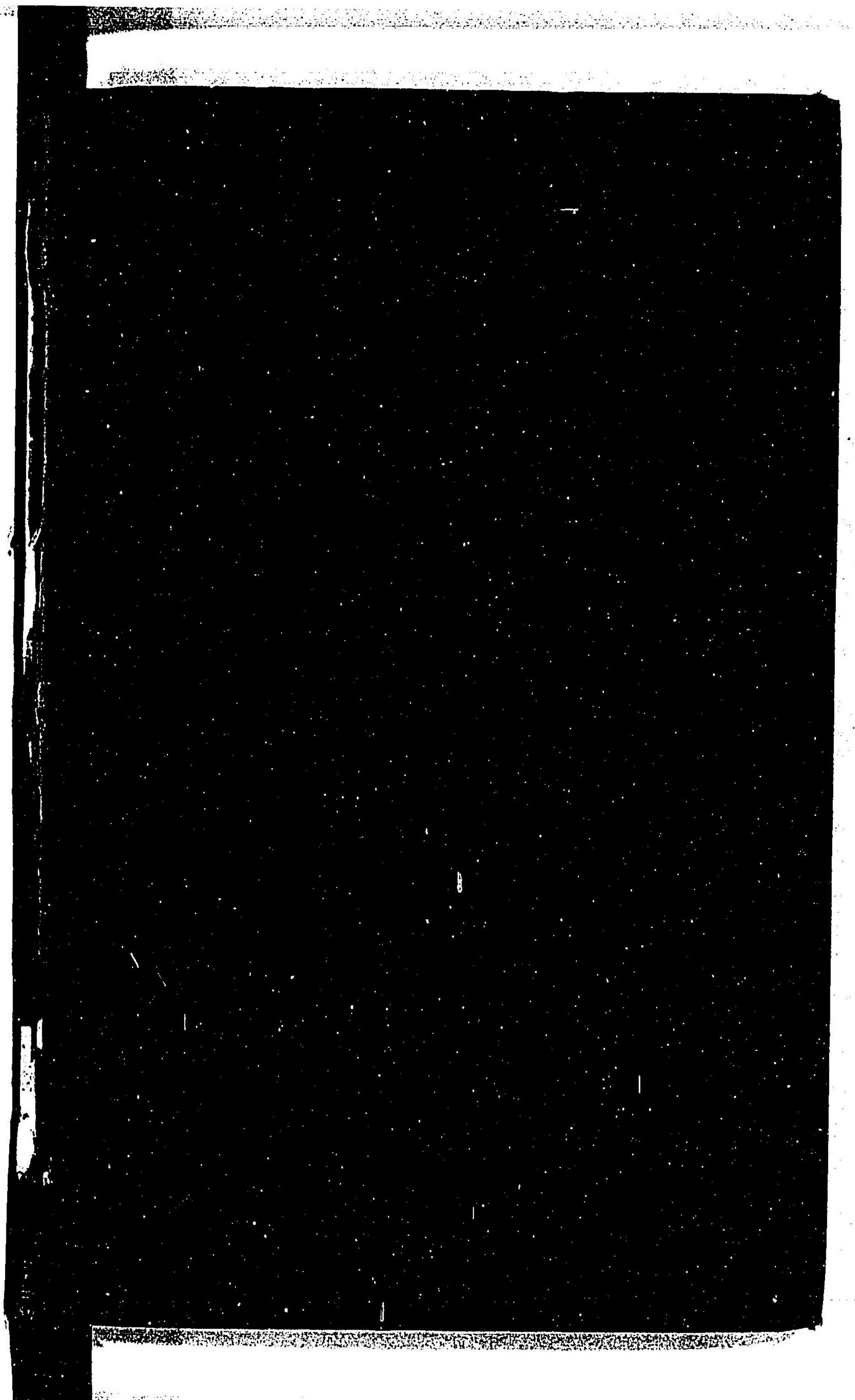
雪月花全三冊
各定價金八十錢 郵稅金四錢

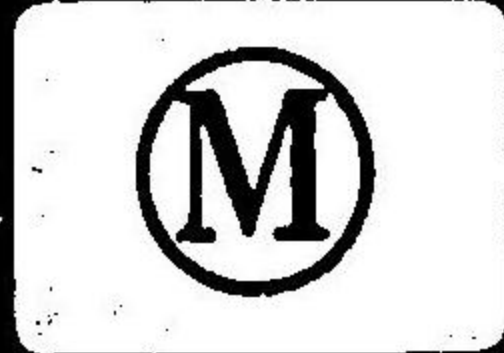
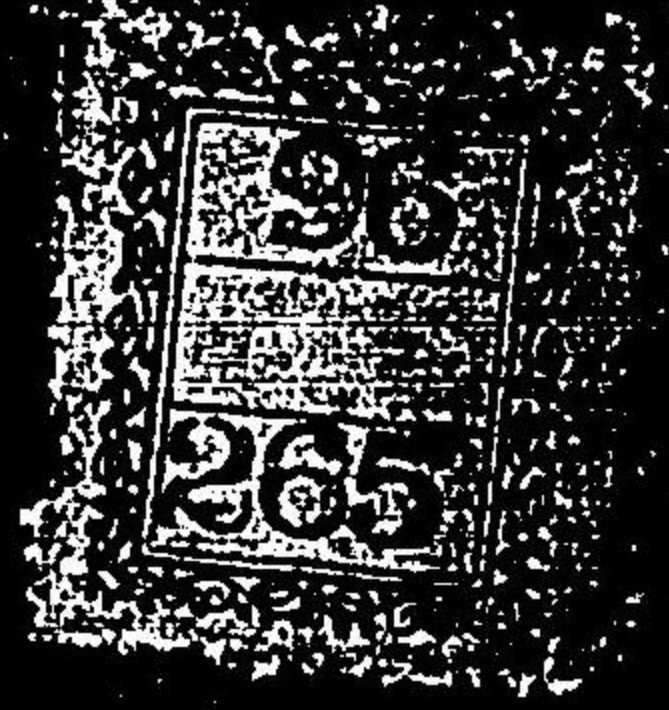
- | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|--------|
| • | • | • | 前 | 御 | 靜 | 著東陣府國 |
| • | • | • | 常 | 盤 | 御 | • |
| • | • | • | 前 | 御 | 袈 | 著士學文田濱 |
| • | • | • | 顏 | 世 | 御 | • |
| • | • | • | 侍 | 內 | 當 | 著士學文林小 |

(錢二稅郵錢三十價定各本美珍袖切三倍二六四)



96
265





027395-000-6

96-265

万国女子風俗

渋谷 馬頭/著

M36

ADJ-0164

